

日系アメリカ野球のパイオニア銭村健一郎

Bill STAPLES, Jr. / 吉田恭子 (訳)

(冒頭でNHKドキュメンタリー「夢と希望のダイヤモンド～ある日系人野球選手のお話～¹⁾」のオープニングを紹介)

はじめまして、ビル・ステイブルズです。野球史研究家で『日系アメリカ野球のパイオニア銭村健一郎』の著者です。今日ここで銭村さんの生涯と遺産の話ができるのは光栄です。

本論に入る前に、招聘いただいた立命館大学関係者のみなさんにお礼を申し上げます。とりわけ吉田恭子教授は野球史研究の同僚であり、2006年以来野球研究で協力してきました。なんと、実際合うのは今回が初めてです。

国際言語文化研究所のみなさん、とりわけ高橋所長、安川さん、志賀さん、清水さんにも感謝します。

それから今日のシンポジウムにコメンテーターとして参加される石原さん、高野さん、正木さん、ありがとうございます。

銭村の話をするにはまず少し私自身の話をしなければなりません。私の人生がいかに関の人生と交錯しているか。私は10歳のとき野球の虜になりました。当時テキサス州ヒューストンに暮らしており、アストロズを応援していました。アストロズは2017年にワールドシリーズを制覇することになる、それから一年もたたないうちに自分が日本で野球史の講演をすることになる、と当時言われても信じることはなかったでしょう。

日本の文化に興味をもつようになったのは30年前のことでした。当時18歳で、アメフトと野球をプレーするのに熱中していましたが、絵を描いたり文章を書いたりすることにも熱中していました。芸術肌の体育会系だったんですね。大学一回生のとき、アメリカの詩人ゲイリー・スナイダーの作品を通して日本の美に初めて触れました。1950年代、スナイダーは京都の大徳寺や相国寺といった有名な禅寺で仏教を学んだのです。

仏教への興味からデイヴィッド・フォークナー著『王貞治～禅としての野球道²⁾』という興味深い本へたどり着きました。世界のホームラン王、王貞治の伝記です。私は王さんのファンになり、この本は私の座右の書のひとつとなりました。メジャーリーグの打撃王ピート・ローズに2002年に会う機会があったときも、『禅としての野球道』に載っているピート・ローズの写真にサイ

ンを頼んだほどです。

ここで私の23年に及ぶ伴侶、今回の訪日に同行してくれた妻のカイラも紹介させてください。というのも私達が20歳の時に会おうはるか前から、彼女も日本との個人的つながりがあるからです。1960年代のはじめごろ、カイラの家族は日本に移り住みました。父親がアメリカ空軍に勤務しており立川に配属になったからです。妻は3人きょうだいの末っ子で、真中の兄が1965年日本で生まれています。彼は日本とアメリカの双方で育ったのです。一家は妻が生まれる前にアメリカに戻ったのですが、日本での暮らしの素晴らしい思い出話を数えられないほど聞かされて育ちました。残念ながら彼女の家族はみな亡くなってしまいました。ですからある意味今回の旅は一族の思い出を懐かしむ慰霊の旅なのです。

くわえてカイラの大叔父はテキサスのニグロリーグでプレーしたプロ野球選手でもありました。ロバート・ベイリーは1920年代のテキサスの大選手たちとプレーしてきました。中にはニューヨーク州クーパーズタウンに野球殿堂入りした人もいます。大叔父は日本に来ることはありませんでしたが、彼の仲間には来日した者もいました。ビズ・マッキー、アンディ・クーパー、オニール・ブレン、そしてウィリアム・ロスです。彼らの果たした大切な役割についても今日は触れる予定です。彼らもまた銭村に影響され、そこから拡大した日系野球遺産とつながっているからです。

アリゾナの日本人スター

今回、アリゾナから9629キロを旅してきたわけですが、まさに今この時期、メジャーリーグ球団の半数はアリゾナで春季キャンプとオープン戦のさなかにあります。今この瞬間、自宅からわずか数マイルの場所で日本の大選手が大勢プレーしているのです。みなさんもよくご存知でしょう。エンジェルスの大谷翔平、ドジャースの前田健太、カブスのダルビッシュ有、ダイヤモンドバックスの平野佳寿（よしひさ）、パドレスの牧田和久、それからマリナーズの岩隈久志と鈴木一郎。（イチローが今シーズンも戻ってくると知って胸が熱くなりました）

さて、彼らはどうやってアメリカにたどり着いたのか。努力？才能？飛行機で？すべて正解ですが、日系野球の歴史を知る者にとって、彼らが今日メジャーでプレーしているのは、彼らが日本とアメリカをつなぐシンボルとしての「太平洋の架け橋」を渡ったからにはほかなりません。この何ものにも代えがたい橋は多くの人々、とりわけ日系アメリカ人の努力によって打ち立てられました。この「太平洋の架け橋」を設計建立した最重要人物のひとりが銭村だという話を今日私はお伝えしたいのです。

ホームプレート

野球の大冒険はつねにホームプレートから始まります。私の話もそうです。2003年、私の一家

はアリゾナ州チャンドラーに引越しました。ヒラリバー・インディアン居住区の北側に隣接する人口 20 万人の街です。ヒラリバーに住むのはピマ族で、アリゾナに何世紀にも渡って暮らしてきたネイティブアメリカンの部族です。

私は少年野球のコーチもやっぴまして、チャンドラーに引越したとき、ヒラリバーでコーチができないか調べてみました。そこで、グーグルで「ヒラリバー」と「ベースボール」でサーチをしたのです。少年野球関連の結果はゼロでした。かわりに出てきた結果がこれでした。

「アメリカとしてのベースボール」展。

銭村球場の手作り木製ホームプレート，設計銭村健一，1943 年，ヒラリバー収容所³⁾

この出会いがある前にも、私は野球についていろいろ調べてきましたし、アメリカの国民的スポーツについて知るべきことは全て知り尽くしていると思っていました。けれども実のところ銭村や日系野球については何も知らなかったのです。日系アメリカ人が戦時中抑留されたことについて多少は知っていましたが、その程度でした。

くり返しますが、2003 年のことでした。9/11 のテロリスト攻撃の 2 年後、アメリカはイラクと戦争中でした。悲しいことに、多くのアメリカ人が戦時の過剰反応で、アラブ系アメリカ人を収容所に送るべきだといった話をしている時期だったのです。第二次世界大戦中に日系アメリカ人を強制収容したように。

1941 年 12 月に日本がパールハーバーを爆撃した後、合衆国大統領フランクリン・ローズヴェルトは大統領令 9066 号に署名し、西海岸在住の日系人すべてを監禁する許可を政府に与えました。その結果、およそ 12 万人の日系人が西海岸の住居から退去させられ、アメリカ南西部の収容所、鉄条網の中に監禁されたのです。

「(日系人の収容は) どのような人々にも決して起こってはならないことの嚴重な教訓であり続けるべきだ」とダニエル・イノウエ連邦下院議員は言っています。自分の国が 9/11 に反応するさまを見て、過去の過ちが繰り返されないか心配でした。

ですから、私のリサーチと銭村健一の伝記執筆は、9/11 に対する心情的な反応だったのです。過去に叡智を求める試みでした。表面上、この本は日系アメリカ人の経験の話ですが、実は歴史を超えて人間の置かれた状況につながる話なのです。

また私はある問いへの答えを知りたいとも思っていました。「不幸で不自由な世界の中で人はいかに幸福と自由を見出すのか？」

銭村の人生について 3 年リサーチし、3 年かけて執筆をし、何年も本書の話をしてきて、この問いへの答えを見つけたと信じています。それについては講演の終わりでお話ししましょう。

銭村の生涯

銭村健一郎ことケンイチ・ゼニムラは1900年1月25日広島に生まれました。1907年にハワイのホノルルに移り、野球への情熱と技術を育みました。1920年に野球をやる目的でアイオワの大学に入学し本土に渡ります。けれども道が外れて、おそらくは女性のため、つまり未来の妻となるキヨコに出会ったからだと思われませんが、カリフォルニア州のフレズノに居を構え、家庭を構えます。そしてカリフォルニアの日系リーグでセミプロ野球を続けることになるのです。リーグの大半は彼自身が組織したものでした。

なぜフレズノを去ってプロ野球の世界を目指さなかったのでしょうか？それについては、しばらく後に検討します。

1942年、西海岸の日系人は強制的に住まいから追い出され、収容所に送られました。フレズノの住人の殆どはアーカンソー州に送られましたが、ケンイチの妻キヨコは喘息もちだったため、乾燥気候のアリゾナ州ヒラリバーに送られたのです。銭村は戦後1945年フレズノに戻り、選手・監督として野球を続け、アメリカと日本の野球親善に努めます。最後の試合は55歳のとき、キャッチャーでした。残念ながらトラックで仕事中に飲酒運転の車に衝突されて、その負傷がもとで亡くなりました。1968年11月13日のことです。

銭村の遺産

ここで銭村がいかにして「日系アメリカ人野球の父」の称号を得るに至ったか、私の本のまえがきの内容に沿って、説明します⁴⁾。

ジャッキー・ロビンソンやニグロリーグのチームメートたち同様、日系アメリカ人も、白人の偏見と差別のために1900年代から1940年代にかけて自分たちのリーグでプレーせざるをえなかった。ロビンソンが1947年近代プロ野球でプレーする最初のアフリカ系アメリカ人となり、勇気をもって人種の壁を超えた物語を、21世紀初めの今日知らないアメリカ人はまずいない。メジャーの試合を見に行けば、どの球場にも彼の偉業をたたえて永久欠番42のユニフォームが展示されている。

野球ファンの間でも20世紀初期の日系アメリカ人野球、いわゆる二世リーグの物語を知る者は少ない。知られていないにも関わらず、彼らのリーグのインパクトは今日の野球に認めることができる。とはいえそれは情報通にしか目に見えないような、かすかなものではある。その偉業は永久欠番のユニフォームではなく、ユニフォームの背中に刻まれている名前だ——イチロー、大谷、ダルビッシュ、金田、田中……

2017年シーズンの終わりの時点で、メジャーでプレーしたアジア人は延べ約100人にもものぼる。その内訳は、台湾出身が14名、韓国23名、日本63名……立命館が誇る長谷川滋利も含まれる。

国民的遊戯が事実上国際的遊戯となったのは、日系野球と銭村健一のようなパイオニアが今に伝える遺産である。

生前、銭村はセンスあるプレーと野球への情熱で知られた存在だった。アメリカ式のプレーを日本、朝鮮、中国に紹介した。1924年のツアーでプレーする銭村を見た後、ジャパン・タイムズのある記者はこう述べている。「銭村は記者が目にした中では最も機転が利いて見応えのある選手のひとりである。ダイヤモンドの脅威であり、すべてのポジションをプレーできる男。油断がならず老獪で、どんな対戦相手にとっても強敵である」

銭村の名声は年とともに広まり、1937年日本をツアーしたときは、以前のツアーで見せた技からアメリカのプロ選手だと思われ、アマチュアの試合でプレーすることを禁じられたほどであった。

1923年から31年の間はメジャーリーグ訪日の空白期間だった。（1928年タイ・カップが単身ツアーをしたが、これはチームの巡業ではなかった）この時期アメリカから訪れた最強のチームは、二世野球とニグロリーグのチームで、銭村のフレズノ体育会や殿堂入りしたビズ・マッキーのフィラデルフィア・ロイヤル・ジャイアンツなどである。8年のメジャー空白期間、二世とニグロリーガーが日本のプレーレベル向上に貢献し、1931年と34年のルー・ゲーリックやベープ・ルースのようなメジャーのスター選手ツアーのお膳立てをした。そして日本職業野球連盟が1936年正式に発足する。

1962年、地方紙『フレズノ・ビー』のベテランスポーツ記者トム・ミーハムが銭村を「二世野球の大御所」と讃えた。1968年銭村の死後間もなく、同紙のエド・オーマン記者によって同様の意見が表されている。それから約四半世紀後、野球史家のケリー・ヨー・ナカガワがミーハムやオーマンの賛辞を現代向けに更新し、銭村を「日系アメリカ人野球の父」と称した。ナカガワによれば、選手・監督・国際そして多文化間の野球親善大使として他に類を見ないキャリアの銭村こそこの称号がふさわしいのだという。

中には銭村にこれほどの賛辞は見合わないと批判する者もいる。面白いことに、反対意見は日系アメリカ人コミュニティから上がってくるのである。銭村は日系野球の最初の選手でも最強の選手でもない指摘する日系人がいる。野球の歴史に詳しくない者の中には、「銭村なんてベープ・ルースとルー・ゲーリックと写真を撮っただけじゃないか」と皮肉を言う者までいる。また他には、「どの収容所にも銭村と同じことをした人間がいたのだ」と言って、第二次世界大戦中の収容所で野球リーグを組織したことで銭村ひとりが過剰に評価されていると感じている者もいる。

この批判に対しては日系アメリカ人とジャッキー・ロビンソンの比較が有効だろう。ニグロリーグ野球界、とりわけ元選手や研究者からは、ジャッキー・ロビンソンばかりが過剰に評価されているという苦言がある。それに対してスポーツ放送リポーターのボブ・コスタス氏はこう応じている。「ジャッキーは確かに最初のひとりではなく、先駆者がいた。ジャッキーは最強の選手でもなく、統計上はもっとすごい成績を上げた者がいた。それを認めた上で、ジャッキー以上に重要な役割を演じた人間がいるだろうか？」

同じことが銭村にもいえるだろう。日系アメリカ人野球の物語で彼以上に重要な人物はいない。もちろん彼の先駆者はいる。もちろん彼より良い数字を残した人物もいただろう。(二世リーグの統計はあまり残っていないので推測だが)けれども、日系アメリカ人野球の特徴と絶えることない遺産を検討すれば、銭村が最大の影響を持っていたことが明らかである。

日系アメリカ人野球の遺産の5つの特徴

1. 正式なリーグとチームの発展

日系アメリカ人は早くも1903年の時点で自分たちのチームを結成し、1910年には日系リーグを設立していた。シアトルやサンフランシスコ、オークランド、サンノゼ、フレズノ、ロサンゼルスといった西海岸の諸都市と中小都市では、二世リーグは戦前のファンに高レベルで経済的にも利益を生み出すような野球と娯楽を提供した。

銭村の貢献：1918年から55年の間に、日系アメリカ人の野球チーム、リーグを生み出し、維持し、発展させる銭村の努力は弛まざるものであった。

2. 高レベルの対戦

最強チームを作り上げるには最強の対戦相手が必要だと銭村は信じていた。そのために銭村と二世のチームメートらはパシフィック・コースト・リーグやカリフォルニア冬期リーグ、大リーグやニグロリーグ巡業チーム、日本からの訪問チームなどとの試合を組んだ。それぞれの試合において、二世の選手らは同じフィールドで戦うレベルがあることを証明したばかりか、相手を打ち負かすこともしばしばだった。1920年から40年にかけての二世リーグの試合スコアと試合成績の研究によると、プレーのレベルはニグロリーグの一般的評価にかなり近いものだという。リーグの全員がメジャーレベルというわけではなかったが、スター選手は、機会さえ与えられれば、大リーグで白人選手と争える力があることを何度も証明した。

銭村の貢献：パシフィック・コースト・リーグ、カリフォルニア冬期リーグ、ニグロリーグ、日本の選手やチームとの試合数（または勝利数）において銭村を越える日系アメリカ人選手はいない。

3. 戦前野球の親善大使

一世・二世の野球選手にとって、「野球のユニフォームを身にまとうことは星条旗を身にまとうこと」であった。野球を受け入れること、愛すること、プレーすることで、日系アメリカ人は合衆国への忠誠を身をもって表現できると信じていた。同時に、自分たちの文化や日本の家族や友人との絆も保ち続けた。絆のひとつは双方にある野球愛であった。野球は1872年日本に導入され、20世紀のはじめには日本で最も人気のあるチームスポーツとなった。二世チームは早くも1914年に親善ツアーに着手、20年代初頭から30年代終わりまで、アメリカのスポーツを日本に紹介し、日本の訪問チームをアメリカに受け入れる上で重要な役割を担っていた。どちらの場合も、対戦交流によって日本の野球技術、レベル向上に貢献し、1936年には日本独自のプロリーグを設立するきっかけともなった。

日系アメリカ人は直接フィールドでプレーしていないときも、フィールドの外、裏方として関わってきた。双方の国の言語や文化習慣を理解していたために、日系人は白人チームや黒人チームの日本遠征、そして日本のチームがアメリカに来訪するときに重要な役割を負ってきた。

銭村の貢献：野球親善大使、野球起業家、野球外交官として、銭村はカリフォルニアの二世チームの日本初ツアーを率い、その後も日米双方の遠征に参加してきた。

4. 第2次世界大戦の収容所野球

アメリカの野球史において、比類ない一方で悲劇的でもあるのは、第2次世界大戦の収容所野球であろう。鉄条網の中で国民的遊戯が始まったのは、フランクリン・ローズヴェルト大統領が大リーグコミッショナーのランディス判事にあの有名な「青信号書簡」——1942年シーズンもプロ野球を継続するべきだという書簡——を送って間もなくのことであった。その数週間後、大統領令9066号にローズヴェルトが署名して、西海岸に居住する12万人以上の日系一世と二世を立ち退きさせ強制収容するお膳立てをしたのだった。一家は所有物を売り払い、スーツケース2つ分の持ちものしか携帯を許されなかった。アメリカ西部とアーカンソー州に散らばっていた10のキャンプのどこにおいても、野球は生き残りの鍵となった。選手、観客ともに、人々の意欲維持に貢献した。どのキャンプにも野球場が少なくともひとつはあり、野球リーグがあった。球技レベルの高いキャンプでは、地元のトップレベルの高校チームやクラブチーム、さらにはセミプロとの試合が組まれた。試合の結果はさして重要ではなく、収容された日系アメリカ人とキャンプの鉄条網の外側に暮らすアメリカ人との関係修復に寄与したことが重要だった。

銭村の貢献：収容所に到着して数週間のうちに、銭村は球場建設を始めた。1943年から45年の間に、銭村は収容所外部のチームと約40試合を計画し、すべての試合に選手もしくは監督として参加した。勝率は7割5分以上で、その中にはアリゾナ州トップの白人や黒人のセミプロクラブも含まれていた。

5. 戦後の野球親善大使

戦後白人との関係修復が重要であったのと同様に、日系アメリカ人は国際的に日本との関係修復も重要だと理解していた。残念ながら、1945年以降二世リーグの参加は戦前レベルに戻ることはなかった。野球を続け、高レベルの試合を望んだ二世たちには選択肢があまりなかった。フィーバー平山こと平山^{さとし}智、銭村健四、ウォーリー与那嶺こと与那嶺^{かなめ}要のようなアメリカ人選手は大リーグに参加する準備ができていたが、大リーグのほうが準備ができていなかった。そこでかわりに彼らは日本に渡り、日本のプロ野球でプレーしたのだ。

銭村の貢献：戦後も銭村は日米の野球大使として働きを続けた。日本のチーム、選手、職員を受け入れたことに加え、スカウトとしてアメリカ本土とハワイの選手が中部カリフォルニアの大学や日本のプロチームと契約する橋渡しを行った。

本書執筆にあたっての調査、また二世野球を研究する野球史家の調査によって、日系アメリカ人野球のさまざまなパイオニアが発掘された。だが、彼らに比しても銭村の活躍は抜きん出ている。それぞれの領域における活躍がすばらしいばかりか、彼の仕事全体をまとめたときに突出しているのだ。このすばらしい遺産がゆえに、ケリー・ヨー・ナガノの主張、銭村健一郎こそ「日系アメリカ人野球の父」という主張に私も同意する。

さてここで、日本からの移民がアメリカに到着したときの社会風潮について話をします。

もうひとつの人種の壁

1913年、世界親善ツアーに出発した後、ニューヨーク・ジャイアンツの監督ジョン・マグローはこう断言しました。「俺の予言を覚えておけ。今から10年後には日本からスター選手が生まれるはずだ」

予言は50年ほどの的外したわけですが、マグローが日本の選手にこれほどの才能を見出したにもかかわらず、なぜこれほど時間を要したのでしょうか？村上雅則が最初の日本人として大リーグと契約した1964年まで待つことになったのはなぜなのか？

プロ野球の白人選手とオーナーたちは、19世紀の終わりに黒人をプロ野球から締め出す「紳士協定」を結びました。日本選手にも同様の偏見があったのでしょうか？

野球以外のあらゆる領域において、アメリカの日系人が20世紀初めに人種差別に直面したことについては証拠が残っています。公民権活動のパイオニアであり、NAACPこと全米黒人地位向上協会の創始者であるW.E.B. デュボイスも1913年にこう述べています。「日本人が平等な人権

をめざして戦っているのは、黒人が自分たちの人権のために戦っていることとも繋がる。教養のある人間であれば、人種を問わずに、人種の壁は人為的なものだと理解している」

ここで野球の「もうひとつの人種の壁」について見ていきましょう

日系人がアメリカの国民的遊戯に記録を残すようになったのは19世紀終わりごろからです。1897年6月、クリーブランド・スパイダーズのパッシー・テボーは「力士ソラキチの親戚」で身長わずか160センチの外野手と契約を結ぼうとしました。ソラキチ・マツダこと松田幸次郎の弟はテボーの目を引く以前はシカゴのアマチュア野球選手でした。当時の雑誌『スポーティング・ライフ』によると、この日本人有望選手は「ダイヤモンドの驚異、今世紀最大の選手」になるだろうとテボーは考えたそうです。

この日系外野手が結局クリーブランドでプレーしなかった理由を伝える報道はありませんが、8年後、その理由の説明となるような事件が起こりました。

1905年、ジョン・マグロー率いるニューヨーク・ジャイアンツで日系野球選手がトライアウトをする予定だとニューヨークタイムズ紙が報じました。23歳の外野手シュンザ・スギモトがアーカンソー州のホットスプリングスでチームに合流するよう招聘されたのです。報道によるとスギモトは体重わずか53キロの「柔術エキスパート」で、体重80キロ近いジャイアンツの外野手マイク・ドンリンを組み伏せたとか。スギモトは選手として必要な才能を「すべて持ち合わせて」いて、「とてつもなく俊敏で、見事なバッターであり、足も速く、フライやゴロの捕球も人並み外れて正確だ」とマグローは評しました。けれども才能だけでは不足だったのです。スギモトは1905年シーズンにマグローと契約を結ぶことはありませんでした。まさに人種がその理由だったようなのです。プロ野球界は日系選手が人種の壁を越えることを不安視したのです。春季キャンプも終わりにかけて、この不安が新聞紙上で議論されました。「人種の壁は日系選手にも及ぶべきか？」この問いに対して、雑誌『スポーティング・ニュース』の全般的なコンセンサスは、イエス、でした。スギモトは報道陣に「自分の場合にも人種の壁が当てはまるとは不本意」と述べ、代わりにニューオーリンズの人種統合したセミプロチームに加わることを決断したのです。

1897年のソラキチ・マツダの弟と1905年のシュンザ・スギモトの事例からも、メジャーリーグの人種の壁が、日系アメリカ人から最高レベルのリーグで戦う機会を奪った可能性があることがわかります。

実際、スギモトから50年後、また別の才能ある選手が、自分はプロ野球界で歓迎されていないと感じたと述べています。フィーバー・ヒラヤマこと平山智はカリフォルニア州エクスターでフットボールと野球の両方をプレーし、1950年代初頭に銭村のフレズノ二世クラブと争っていました。1954年に平山はセントルイス・ブラウンズ（現在のボルチモア・オリオールズ）でプレー

する契約にサインしました。2012年のインタビューで、契約にはサインしたが、フェアな機会を与えられるとは感じられなかったし、自分のメジャーへの道程は日系人であるがゆえに険しいものとなるだろうと感じた、と平山は告白しています。「当時（1955年）大リーグは自分たち（日系アメリカ人）に門戸を閉ざしていると感じた。日本に渡ってプレーした理由のひとつはそこにある。ある意味、黒人選手が経験したことと同じ壁に直面したのだ」と平山は述べています。

銭村の尽力によって、平山は広島カープと契約し、外野手としてオールスター戦にも出場、ファンの人気者となりました。「僕が日本に行くことができたのも、銭村さんが僕を信じてくれたおかげです」と後日平山は述べています。

以上のようなエヴィデンスにもかかわらず、野球史家のなかには日系選手を排除する人種の壁はなかったと主張する者もいます。20世紀の初頭にプロ契約を結んだ日系自選手がちらほらいたという事実を根拠としたものです。ハワイのアンディ・ヤマシロは1917年にペンシルヴェニア州のゲティスバーグ・ポニーズと契約していますし、ジミー・ホリオこと堀尾文人は1934年にサウスダコタ州のスーフォールズ・キャナルズでワンシーズンのみプレーしています。また、1935年にペンシルヴェニアのフィラデルフィア・アスレチックスのコニー・マック監督が沢村栄治を欲しがったことはよく知られています。

この反論に対して、1947年、ジャッキー・ロビンソンが人種の壁を超えたときのことを思い返してほしいと申し上げます。正確には、彼は人種の壁を破壊したわけでも、すぐさま消し去ってしまったわけでもありません。ロビンソンが人種の壁を超え、そこから徐々にリーグ全体から壁が崩れていったのです。最後に黒人選手を受け入れたのはボストン・レッドソックスで、なんと1959年のことでした。黒人に対する人種の壁が完全になくなるまで12年かかったこととなります。ですから、合衆国のある地域のチームオーナーが有色人種を受け入れようとする一方で、別の地域はそうでないというのはまったく理にかなっていることなのです。ペンシルヴェニアのようなリベラルな州ではあらゆる人種・宗教・信条の人間を迎え入れるのに対して、他の州はそういうわけではなかったのです。1947年の時点で黒人選手に対してそうだったわけですし、20世紀初頭の日系アメリカ人に対しても同様だったのです。

当時、日系人に対する人種憎悪は、アフリカ系アメリカ人を二級市民として扱った南部諸州のジム・クロウ法に比するものでした。

1920年代初頭、田舎の町には「日本人お断り」という看板が出るようになりました。そこで銭村はやったことは何か？その町で野球の試合を組んだのです。というのも、自分のチームがそこへ行って「いい野球」をやれば、ゆくゆくは他人と繋がり、障壁を崩せると知っていたからです。実際その通りのことが起こったのです。徐々に看板は消え、さらに試合が組まれるようになりました。

けれども、1924年の時点で銭村の努力は報われなくなります。中部カリフォルニアで新しいセミプロリーグ、サンホアキン・バレー野球リーグが創設され、予定されたリーグの6チームの中で、銭村のチームは唯一の日系クラブでした。ところが、日本人の参加を許すのであれば、自分たちは新リーグに加わらないと言い出したチームがあったのです。「ポーターヴィルで日本人がプレーすることに反対です」と地元の指導者たちは宣言しました。「他の領域で日本人を締め出してきたのだから、もし野球で許してしまえば、ファンもやって来るし、それはお断りです」と。さらに、「ここは白人の町だし、これからもそうありつづけるのだ」と。残念なことに、リーグの役員たちは銭村とその日系クラブを新リーグから排除したのでした。

そこで、銭村は他の場所にハイレベルの対戦場を求めざるをえなくなり、実際くじけない彼はそうしたのです。

1924年3月、銭村はソルトレイクシティ・ビーズと3試合のシリーズ戦を組みました。パシフィック・コースト・リーグ所属のユタ州チームです。ビーズは春季キャンプをフレズノで行っていたのです。初戦フレズノ体育会はビーズを6対4で打ち負かします。

3ゲームのシリーズ中に、ビーズはサンフランシスコ出身の新人投手兼外野手、フランク・“レフティ”・オドゥールと契約をします。オドゥールと将来ヤンキーズに入団し野球殿堂入りするトニー・ラゼリの打撃で、ビーズは残り2ゲームに勝利します。

パシフィック・コースト・リーグのチームに銭村が勝利したことは歴史的でした。けれどももっと重要なのは、オドゥールがラインナップに加わっていたことでしょう。この人好きする左腕選手は後年アジア巡業ツアーを何度も率いて、戦後アメリカと日本の野球大使として重要な役割を演じます。この役割のために、2002年、オドゥールは日本で野球殿堂入りすることになるのです。それを念頭に振り返ると、1924年の試合はオドゥールが日系野球チームと接触をした最初の記録にあたります。

1924年の5月に銭村のクラブが当時の六大学野球の覇者であった明治大学と二試合を行ったこともつけ加えておきましょう。明治大学のアメリカツアーのさなかに、カルヴィン・ターリッジ大統領は1924年移民法に署名したのでした。アジアからの移民を厳しく制限する法律でした。

太平洋を渡るベースボールの橋

ここで太平洋を渡るベースボールの橋を架けるにあたって、日系アメリカ人が果たした役割を浮き彫りにしてくれる統計を紹介しましょう。

日系アメリカ人野球の歴史を後世に伝えるために発足した非営利団体二世野球リサーチ・プロジェクトが行った調査によると、1905年から40年の間に、合衆国本土、日本、ハワイの間でお

およそ 98 のツアーが生まれ、その 3 度のうち 1 度は、日系アメリカ人チームの日本訪問でした。(23 ページ Appendix A の表を参照のこと)

1923 年から 40 年にかけてに限定すると、銭村の貢献がはっきりしてきます。

1923 年から 40 年にかけて、53 の国際ツアーがありました。銭村が何らかの形で関わったのはそのうち 17 回 (32%) です。チームを率いて 3 度来日 (24 年, 27 年, 37 年)。直接参加しなくとも、ほかの日系アメリカ人チーム、ニグロリーグのチーム、メジャーリーグのオールスターズのツアー合計 14 に間接的に関わっています。(Appendix B 参照のこと)

14 回のツアーすべてに言及することはできませんが、そのうち 3 つについて、その重要性を指摘しておきます。

- ・ 1927 年フィラデルフィア・ロイヤル・ジャイアンツの来日 (ロン・グッドウィン監督)
- ・ 1929 年明治大学のアメリカツアー (松本瀧蔵監督)
- ・ 1934 年メジャー・リーグ・オールスターズ来日 (ベープ・ルース来日)

けれどもその前に、1923 年から 40 年の日米野球関係がなぜ重要かということ、1922 年にある問題が生じたからなのです。まずはそこから説明します。

1922 年のハーブ・ハンター・オールスターズ

1922 年の 10 月、ハーブ・ハンターのオールスターチームが日本へ向けて出帆します。到着するなり、あらゆる大学チーム、産業チーム、アマチュアチームを打ち負かしますが、ただひとつ例外がありました。

11 月 23 日、ハンターのオールスターズは後に殿堂入りする投手の小野三千磨が率いるアマチュアチームの三田倶楽部 (慶應 OB チーム) に 9 対 3 で破れます。一見、三田倶楽部とファンはアメリカ人に勝利して喜びそうなものですが、実際は違いました。日本からの報道を見てみましょう。

日曜日に地元三田倶楽部との試合を投げたアメリカの野球選手らは、アメリカのスポーツマンシップに対する評判を地に貶めた。三田は確かに全国的にも強いチームだが、アメリカのプロに適うはずもないのだ。アメリカ人らは大阪や他の地域での入場収入を増やすために宣伝目的でレベルを下げたのだというのが、正直な世論であった。東京朝日新聞は以下のように失望を表明した。「我々がアメリカチームを歓迎したのは彼らが紳士的でスポーツマンだと考えたからであった。我が国の野球ファンはアメリカ人が真剣に三田を負かそうとしたと信じるほど愚かではない……彼らは我々の期待を裏切り、不快な印象を残したのだった⁵⁾」

負け投手のウェイト・ホイトは後日こう述べています。自分とチームメートはフィールドでたんに「ふざけて道化を演じていた」だけで、日本の受け入れ先の敬意を踏みにじる気はなかった、と。にもかかわらず、関係は傷ついたので。加えて、1923年の関東大震災、大リーグコミッショナー、ランディス判事によるオフシーズン中のメジャー選手に対する規制といった要因も加わり、それ以来8年にわたって大リーグチームの日本ツアーが途切れることとなりました。その間の空白を堂々と埋めたのが、銭村や西海岸の二世チーム、そしてニグロリーグの仲間だったのです。

皮肉なことに、銭村と仲間たちが野球親善大使の役割を担おうとしていた頃、1922年11月13日に、オザワ対連邦政府の最高裁判決が下ります。この判決で、日本からの移民がアメリカ市民権を獲得することが不可能になったのです。日本から米国に渡ってきた銭村健一郎のような一世たちは、アメリカ合衆国を真に自分の国と呼べるようになるまでさらに30年辛抱することになります。

松本瀧蔵

銭村は1920年にカリフォルニア州フレズノに到着し、結成したばかりのフレズノ体育会に入会します。ここでチームのレベルを上げるだけでなく、球場の外でも重要な関係を築いていくのです。とりわけ重要だったのは、フレズノ体育会の創設者の1人であるフランク・ナルシマと松本瀧蔵との関係でした。ふたりには共通点が多く、広島県出身、スポーツ好き、何においても負けず嫌いでカリスマとやる気に満ちている点も似ていました。

ナルシマは1901年日本で松本瀧蔵として生まれました。幼くして家族とフレズノに渡ったときに名前を変えています。合衆国入国間もなく、父が亡くなります。未亡人となった母、松本キヨは、14歳年上の食堂経営者ヒチザ・ナルシマと再婚します。その後、瀧蔵は義父の名字とアメリカ風のファーストネームを名乗り、フランク・ナルシマとして知られるようになるのです。若きフランクは、1916年から19年にかけてアメリカンフットボール、野球、短距離走に秀でて、フレズノ高校でスター選手となりました。

銭村が1907年終わりに叔母のヒロカワ・ヒサとともにホノルルに到着したとき、叔母は日本の親戚は広島市竹屋町に住む松本という名字の女きょうだいだと記帳しています。1910年代の終わりに銭村一家が日本に里帰りしたときは、日本の親戚は同じく広島市竹屋町在住の叔父、松本すとさぶろう〔ママ〕だとも記帳しています。これらの事実から、健一郎の母ワカには松本家に嫁いだ姉か妹がいた可能性があります。もしそうだとすると、この時点で確定はできないのですが、銭村健一郎と松本瀧蔵は遠縁の関係にある可能性があります。

松本瀧蔵が重要な役割を負っているのはなぜか？松本は1920年に日本に戻り、のちに明治大学野球部の監督となります。その後ハーバード大に留学卒業し、1932年、36年、40年に日本オリ

ンピック協会で重職を務め、戦前戦後の日米野球交流において重要な役割を演じます。野球交流の使者としての役割を評価され、2016年に野球殿堂入りしました。

2007年に二世野球リサーチ・プロジェクトは日本の野球殿堂に銭村健一郎の殿堂入りを推薦する申請書を提出しました。そこで強調されているのは、銭村の業績だけでなく、松本が果たした役割です。殿堂入りしたことは、日米野球史で見過ごされてきた重要人物である松本にとって大きな名誉でした。松本の殿堂入りは、日本の松本と協力して野球を愛するふたつの国を結んできた米国の銭村健一郎がいつの日か同じ栄誉を受ける可能性があることを示しています。

銭村の同世代人約20名がすでに日本で野球殿堂入りしています。多くが選手として、中には交流大使として。(Appendix C 参照)。その中から少しだけ紹介しておくと、選手としては、「ボゾ」・ワカバヤシこと若林忠志、田部武雄、水原茂、浜崎真二、野球発展に寄与した人物としては藤田信男、レフティ・オドゥール、そして松本瀧蔵を挙げておきます。

黒きやさしきジャイアンツ

カリフォルニアのニグロリーグオールスターチーム、フィラデルフィア・ロイヤル・ジャイアンツは3度アジアを訪問しています。1927年、1931-32年、1932-33年です。また1928年、1929年、1931年にはハウイツアーの最中に日本のチームと試合しています。日本の野球史家佐山和夫は1986の著書『黒きやさしきジャイアンツ』で、日本にプロ野球が生まれたのはロイヤル・ジャイアンツのおかげだと主張しています。最良のタイミングで来日したというのです。

佐山はこう述べています。「メジャーリーグの訪日が決定的な影響を及ぼしたことは疑いない……だが、メジャーだけしか見ることがなかったとすれば、日本人は自分たちの実力に幻滅しプロ野球へのやる気をくじかれていただろう。フィラデルフィア・ロイヤル・ジャイアンツが来日したからこそ、日本の選手は自信と希望を得て救われたのだ」

日本へやってきたメジャーリーグのスターたちは「俺たちはエキスパートだから、お前たちにプレーの仕方を教えてやる」といった態度だったと述べています。それに対して、ニグロリーガーたちは、「俺とお前は友だちだ。さあ、一緒に野球をやろう」という態度だったというのです。

1927年のフィラデルフィア・ロイヤル・ジャイアンツはロン・グッドウィン監督に率いられ、選手の中には将来アメリカ野球殿堂入りすることになるビズ・マッキー、アンディ・クーパーに加え、ラップ・ディクソンやフランク・ダンカンといったニグロリーグのオールスター選手もいました。

ロイヤル・ジャイアンツは銭村とどのように絡んでくるのでしょうか？来日する以前、グッドウィンのチームはロサンゼルス・ホワイトソックスというセミプロチームとして知られ、銭村

のフレズノ体育会と3度試合をしています。

最初の試合は1925年9月ロサンゼルスでのことで、銭村のチームがセミプロのホワイトソックスを5対4で下しています。翌年の七月、フレズノで2試合続けて行い、銭村のチームがこれも2試合とも勝っています。

この2試合のスコアよりも大事なことは、銭村とグッドウィンの間で交わされた会話でしょう。このときに銭村が日本ツアーを勧めたのだと野球史家たちは考えています。銭村は1926年の終わりにはすでに自分たちの日本ツアーの計画を立てていました。その後間もなくして、グッドウィンは自分のチームをフィラデルフィア・ロイヤル・ジャイアンツと改称し、日本ツアーを決断したのです。日系人ビジネスマン入江譲二の協力を得て、ロイヤル・ジャイアンツ初のアジアツアーは成功に終わりました。

特筆すべきは、日本に渡るにあたって、マッキーやクーバーのような実力選手を加えて初めて、ロン・グッドウィンのチームは1927年4月に明治神宮外苑球場ではじめて銭村に雪辱を果たしたことです。ビズ・マッキーの強力な打撃力を得て9対1でグッドウィンのチームが勝利しました。マッキーはこの試合で神宮外苑史上初の本塁打を放ちました⁶⁾。

みなさん佐川和夫の『黒きやさしきジャイアンツ』をまだお読みになっていないのならば、ぜひ読んでください。日米野球交流史の非常に興味深いエピソードを伝えています。実は、この本をアメリカの読者も読めるようになります。翻訳に携わったアリゾナ在住の日本語話者チームと協力して、私も佐山の代表作の英語版編集に携わりました。2019年には出版される予定です。

また今日はフィラデルフィア・ロイヤル・ジャイアンツのユニフォームのレプリカも持参しました。このジャージーは2008年、カンザスシティ・ロイヤルズとサンフランシスコ・ジャイアンツの試合で使われたもので、これは、サンフランシスコ・ジャイアンツの右腕投手で元阪神タイガースの藪^{けいいち}恵壹選手が着用していたものです。

日本のベーブ・ルース

さて、最後に一番おもしろい話をしましょう。1934年ベーブ・ルースの伝説的な来日にあたって銭村が果たした役割についてです。

1927年10月、ワールドシリーズ制覇間もないニューヨーク・ヤンキースのベーブ・ルースとルー・ゲーリッグは、アメリカ西海岸の諸都市を巡業し、カリフォルニアのフレズノも訪れます。アメリカ西部の日系アメリカ人トップチーム、銭村のフレズノ体育会の本拠地です。

銭村とチームメートのジョニー・ナカガワ、フレッド・ヨシカワ、ハーヴェイ・イワタはゲーリッ

グの“ララピン・ルー”組に加わり、ベープ・ルースの“バスティン・ベープ”組を13対3で下します。

試合の後、6人で撮影したのがあの有名な写真（45ページ参照）です。『フレズノ・ビー』紙1962年の記事によると、銭村は写真の複製を日本の関係者に送ったそうです。銭村はこう述べています。「日本から連絡があり、前金4万ドルでベープ・ルースが日本でプレーできないか問い合わせがあった……ルースに連絡したところ、6万ドルなら行くと言う。当時は高額すぎたのだが、数年後に日本に行って大成功することになった」

研究者の中にはルースの来日にあたり銭村が演じた役割の正当性を疑うものもいました。62年のインタビュー当時62歳の銭村はボケ老人で記者を感心させるために誇張したのだろなどと言う人もいました。

けれども1927年から90年後の2017年、そのような批判は封じられることになりました。銭村が1927年に送った手紙の一部が発見されたのです。大阪の阪急文化財団の正木喜勝さんが財団の資料から手紙を探し当てたのです。（片岡への手紙の全文は47ページを参照のこと⁷⁾）

1927年の銭村の書簡が発見されたことで、1962年のインタビューで銭村はベープ・ルースの招聘について本当の話をしていなかったことがわかったばかりか、日米野球交流において彼が果たしてきた重要な役割を裏付けることになったとだけここではつけ加えておきます。

迫りくる戦争

1937年コーノ・アラメダ・オールスターズ

1937年、カリフォルニア州アラメダの日系アメリカ人ビジネスマンで野球狂だったハリー・コーノがチームを引き連れて日本へ渡る計画を立てました。東京の主催者から資金獲得の約束も得て、3月に出帆する予定でした。実はコーノは前年1936年に日本で生まれたばかりのプロ野球のスカウトとして、日本初の黒人選手となる投手のジェイムズ・ボナー契約を交渉しています。

コーノ・アラメダ・オールスターズはサンフランシスコから秩父丸に乗船し、ホノルルに向かいます。コーノが監督、銭村がヘッドコーチとキャッチャー及び二塁手を務めました。

日本に到着した銭村はプロ野球選手だからという理由で球場から締め出されてしまい、その後一ヶ月間チームに参加することができなくなってしまいます。その結果、銭村が再加入するまでチームは負け続けます。成績は60数ゲーム中、40勝でした。

その間も時間を無駄にすることなく、銭村は東京やホノルルのプロチームのためのスカウトとして活躍します。

1937年のツアーで、銭村は12歳の息子健次と再会することもできました。祖母と暮らすために1928年日本に送られて以来会っていない息子でした。健次は第二次世界大戦中、帝国海軍のパイロットとして従軍することになります。

1937年のツアー後、1938年そして1940年にはオリンピックのために里帰りする計画を立てます。オリンピックでのアマチュア野球の試合のために東京のホテルを60室以上も押さえておいたそうです。

1940年東京オリンピック

1938年、銭村は自動車セールスマンとして働く一方で、野球をプレーし、1940年の東京オリンピックに向けての準備を着々と進めていました。1938年の7月15日、厚生大臣の木戸幸一は国家一丸で戦争準備をしている次節に開催は無理である。仕方がないと、東京オリンピックの開催権返上を決定します。この知らせは銭村を落胆させるとともに第二次世界大戦の訪れの予兆となりました。

戦時の野球

第二次世界大戦中収容所で銭村は収容所の人々の士気高揚のために野球を利用することになるのです。戦時に野球を続けることに価値を見出したのは彼だけではありませんでした。

1942年1月15日、フランクリン・ローズヴェルト大統領は大リーグコミッショナーのランディス判事に当てた手紙を書きます。この歴史的書簡は今日「青信号書簡」と呼ばれていますが、この中で大統領は「野球を続けることがこの国にとって最良のことだと心底感じている。失業も減り、以前より残業も増え仕事も辛くなる。そうなれば娯楽や仕事から気を紛らわせる機会が以前にもまして必要になってくる。私の判断では、野球をやる価値は充分にある」と述べています。

その結果、戦時中も大リーグは継続し、収容所の日系アメリカ人も野球を続けることになるのです。

戦時中不当にも強制収容された日系アメリカ人にとって、ベースボールは単なる遊び以上のもの、心の救いでした。のちにメジャーリーグのスカウトとなるジョージ・オーマチは述べています。「野球がなければ、収容所の生活は惨めなものだっただろう。自分の国なのに監禁されるなんて、屈辱的で不名誉だった」

ビデオでは銭村健次の息子で健一郎の孫に当たる銭村勝二さんが登場します。決して会うことのなかった祖父について調べるためにアメリカへと旅をします。NHKが制作したこのすばらしいドキュメンタリーのおかげで、銭村の孫とともに、アリゾナ州ヒラリバーの日系アメリカ人収容所をみなさんにも見ていただくことができます。（NHKドキュメンタリーの終わり部

分を上映)

ホームへの生還

1945年8月に銭村がフレスノに戻ってくる前、収容所を立ち去る際に、銭村は野球を通しての戦後の平和と民主主義を提唱しました。『ヒラ・ニュース・クーリエ』でこう述べています。「アメリカと日本の関係修復を急ぐべきだ。議論で実現しようとするよりも、スポーツの領域で相互理解をはじめたほうがよりうまくいくだろう」

今お見せしたビデオの中で空港で銭村勝二さんを出迎えていたのはテツ・フルカワさんです。彼が銭村について語ってくれた言葉がすばらしいので、それを紹介して私の話を終えようと思います。

フルカワはこう言っていました。「銭監督は……野球の知識もほんとにもものすごかったのだが、なによりも、自らの責任を果たすことと他者への共感とで、ひとりひとりの選手がよりよい人間になることを望んでいた」

責任を果たすことと他者への共感とでよりよい人間になること。

今日の話の冒頭での問い、「不幸で不自由な世界の中で人はいかに幸福と自由を見出すのか？」に対する答えを銭村が教えてくれたと私は申し上げました。彼の人生を理解していくうちに答えを見出したのです。

ロシアの作家レフ・トルストイの短編に「皇帝の三つの質問」という作品があります。自らに幸福をもたらしてくれるはずである重要な三つの問いの答えを皇帝が探し求めるというものです。その問いとは、

1. 一番大事な時はいつか？
2. この世で一番大事な人は誰か？
3. 今何をなすべきか？

皇帝は旅に出てさまざまな出来事を経ついに答えにたどり着きます。

1. 一番大事な時は今この時
2. 大事な人は今自分の横にいる人
3. なすべきことは自分の横にいる人に喜びをもたらすこと

銭村もまたこの知恵を生涯かかって、とりわけ収容所時代に実行したのでした。

1. 銭村はアリゾナの砂漠に住みたいと思ひもしなかったが、今この時を最大限に活用した
2. そのとき一番大事な人たちはともに収容されていた日系アメリカ人の仲間たちであった

3. なすべきことは彼らに喜びをもたらすために自らの野球に対する知識と情熱を分かち合うことであった

こうして銭村は不幸で不自由な世界の中に幸福と自由を見出したのです。ですから銭村は選手・監督・野球発展に寄与した人物として野球殿堂入りに当たるだけでなく、人類の殿堂入りすべき人物だと思っています。

近い将来ふたたび日本を訪れ銭村の殿堂入りを祝うことができればと思います。次のオリンピックが開催される2020年はどうでしょうか？ぴったりでしょう。

今日のご清聴ありがとうございました。銭村のこと、あるいは今日お話したことで質問があれば喜んでお答えします。

みなさんの方で私に教えておきたいことがあれば、ぜひ教えて下さい。この年になっても学び続けたいと思っています。

銭村の伝記本の終わりの言葉で今日の話も締めくくりましょう。

ピース、ラブ、ベースボール
ビル・ステイブルズ

注

- 1) NHK 広島『夢と希望のダイヤモンド～ある日系人野球選手の物語～』（2012）
- 2) Oh, Sadaharu and David Falkner. *Sadaharu Oh: A Zen Way of Baseball*. Times Books, 1984.
- 3) <https://www.mlb.com/cut4/home-plate-from-japanese-internment-camp-at-hall-of-fame/c-229665148>
- 4) Staples, Bill, Jr. *Kenichi Zenimura: Japanese American Baseball Pioneer*. McFarland, 2011.
- 5) "Big Leaguers Boot One in Japan, Herbert Hunter Takes Major League All-Stars to Japan," *Fresno Bee*, 14 December, 1922, 9.
- 6) ビズ・マッキーによる神宮外苑球場史上初のホームランは1927年4月20日。日本人選手初は慶應義塾大学の宮武三郎で、同年4月29日。
- 7) 銭村の裏書きは以下の通り。「この写真はフレスノに10月29日ベープ・ルースとゲーリックとともにニューヨーク・ヤンキースが訪れた際に撮ったものです。我々はヤンキースとプレーして広く評判になりました。ベープ・ルースは訪日に興味を示していて、僕らのチームと共に日本へ行けるように諸般手配をできないか訊いてきました。明治大学に手紙を送ってベープ・ルース来日のためにどれほどできるか問い合わせています。ベープ・ルースが日本に来れば呼び物となるでしょう。この写真をそちらへお送りするので、一面にお使いください。私からの記念の品です。そちらのチームの皆さんによろしく。日本でふたたび会えることを楽しみにしております。敬具 K・銭村」

